



## Osaka Gakuin University Repository

Title	推古朝前半の外交とその主体 The Diplomacy and its Leader of the first half of the Suiko Dynasty
Author(s)	中田 興吉 (Kokichi Nakada)
Citation	大阪学院大学 人文自然論叢 (THE BULLETIN OF THE CULTURAL AND NATURAL SCIENCES IN OSAKA GAKUIN UNIVERSITY), 65 : 56-42
Issue Date	2012.09.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## 推古朝前半の外交とその主体

### はじめに

崇峻天皇が新羅征討を思い立ち、崇峻四年（五九一年）に新羅征討軍が筑紫に向けて派遣されるが、その軍は崇峻殺害後も筑紫に留まる。その軍は推古三年（五九五年）に帰還を命じられる。このことにより武力を用いた新羅強硬路線は放棄されたかにみえるが、推古八年には新羅征討が計画されるとともに遣隋使が派遣され、翌九年には新羅征討軍が準備される。この遣隋使は失敗に終わるものの、推古一五年にはふたたび遣隋使が送られる。

東アジアの変動がこの外交に深く関わることは言うまでもないが、この外交は誰が主体となって推進されたのであろうか。とくに推古朝における外交については、従来は厩戸皇子を中心に説くばかりであり、推古、厩戸、馬子間における権力構造の変化をおろそかにしたま

ま論じられているように感じられる。<sup>(2)</sup>

そこで以下、この問題について考えることとしたい。

### 一 崇峻朝における外交

まず、崇峻朝の動向から改めて詳しくみてみよう。

その崇峻朝には政治方針をめぐって崇峻と蘇我馬子が対立した。<sup>(3)</sup> その結果、崇峻が弑逆されるにいたるのであるが、二人は任那問題、ひいては新羅外交に関してともに積極的であった。すなわち倭国はかねて任那から調を受けていたのであるが、その任那が五六二年に新羅に滅ぼされてからは、これを非法と見なし、新羅に任那の再興を迫った。<sup>(5)</sup> しかし事態は進展せず、それで積極的に兵を送って解決しようとするのである。<sup>(6)</sup> 『日本書紀』崇峻四年八月条には

中 田 興 吉

天皇詔<sup>二</sup>群臣<sup>一</sup>曰。朕思<sup>三</sup>欲建<sup>二</sup>任那<sup>一</sup>。卿等何如。群臣奏言。可<sup>レ</sup>建<sup>二</sup>任那官家<sup>一</sup>。皆同<sup>二</sup>陛下所<sup>レ</sup>詔。

とあり、崇峻が任那再建の意志を見せ、これにもとづいて同崇峻四年一月条には

差<sup>二</sup>紀男麻呂宿祢<sup>一</sup>。巨勢臣比良夫。狹臣。大伴嚙連。葛城臣烏奈良臣。為<sup>二</sup>大將軍<sup>一</sup>率<sup>二</sup>氏氏臣連<sup>一</sup>為<sup>二</sup>裨將部隊<sup>一</sup>。領<sup>二</sup>二万余軍<sup>一</sup>。出居<sup>二</sup>筑紫<sup>一</sup>。遣<sup>二</sup>吉士金於新羅<sup>一</sup>。遣<sup>二</sup>吉士木蓮子於任那<sup>一</sup>。問<sup>二</sup>任那事<sup>一</sup>。

と、筑紫に將軍以下二万余の軍（以下、本稿ではこれを筑紫派遣軍とする）を送り、また新羅に使者を送り、任那再興のことを問わしめるのである。任那再建をめざした新羅に向けての軍が筑紫に派遣されたのであるが、鬼頭清明氏は崇峻殺害による「ヤマト政権内部の危機と矛盾を克服するためには、任那の調を実現することが、ヤマト政権の権威と統制とを確立するための必要な政策」であったとし、対新羅強硬策との関係を説くが、この政策の主導者を「政権内部で権力を集中しつつあった聖徳太子と、蘇我馬子」とし、「ヤマト政権内部の危機を克服し、権力を集中すべく任那の調を政治目的として征新羅軍が」崇峻四年に派遣されたとする<sup>(7)</sup>。

その派遣軍の構成が注目される。鬼頭清明氏も言及しているように派遣された將軍のうち、紀男麻呂宿祢、巨勢臣比良夫、大伴嚙連、葛城臣烏奈良臣はいずれも用明二年七月に勃発した蘇我氏と物部氏との戦いに蘇我氏側の一員として参加しているのである。すなわち『日本

書紀』崇峻即位前紀用明二年七月条には

蘇我馬子宿祢大臣勸<sup>二</sup>諸皇子与<sup>一</sup>群臣。謀<sup>二</sup>滅<sup>一</sup>物部守屋大連。泊瀬部皇子。竹田皇子。厩戸皇子。難波皇子。春日皇子。蘇我馬子宿祢大臣。紀男麻呂宿祢。巨勢臣比良夫。膳臣賀拖夫。葛城臣烏那羅。俱率<sup>二</sup>三軍旅<sup>一</sup>進討<sup>二</sup>大連<sup>一</sup>。大伴連嚙。阿倍臣人。平群臣神手。坂本臣糠手。春日臣關<sup>二</sup>名字<sup>一</sup>。俱率<sup>二</sup>三軍兵<sup>一</sup>從<sup>二</sup>志紀郡到<sup>一</sup>澁河家<sup>一</sup>。

とあり、四人は蘇我氏側の人物として参戦していたのである。してみれば蘇我馬子と関係の深い軍が送られたと言えよう<sup>(8)</sup>。

その意味では、この筑紫派遣軍は崇峻と馬子の意志によるものであったと言えるが、この馬子の姿勢は推古朝に受け継がれる。すなわち、筑紫派遣軍は「遣<sup>二</sup>駅使於筑紫將軍所<sup>一</sup>曰。依<sup>二</sup>於内乱<sup>一</sup>莫<sup>レ</sup>忘<sup>二</sup>外事<sup>一</sup>。」と、崇峻五年における蘇我氏による崇峻弑逆後もそのまま留め置かれるのである。国内政治の動揺に関わりなく、外事に備えよと命じられているのであるが、この処置について石母田正氏は当時の支配者層の間には内政と外交とは区別すべきものとの観念が形成されていたとし、また西嶋定生氏も東アジアの動揺に備えるための処置であったとし、また井上光貞氏も兵を留め置いたのは隋に備えるためとす<sup>(9)</sup>。確かに五八九年に隋の中国平定がなり、それを受けて東アジアの動静が刻々と変化しているものの、しかし次の表1からうかがわれるように、崇峻四年段階と同五年段階で特に情勢が大きく変化しているわけではないことからすると、侵略に対する備えのためであったとは

表1 朝鮮三国と隋の関係

年月	『隋書』本紀	『隋書』東夷伝・『三国史記』*
五八一年一〇月	百済王遣使、来賀	
五八二年 二月	高麗王遣使、朝賀	
五八二年 正月	高麗、百済並びに遣使、方物を貢ず	
五八三年 一月	高麗遣使、方物を献ず	
五八三年 四月	高麗遣使来朝	
五八四年 五月	高麗遣使来朝	
五八四年 四月	高麗の使者などに宴す	
五八九年		(伝) 百済、平陳を賀す
五九〇年 八月	高麗王卒	
五九一年 正月	高麗遣使、朝賀	(記) 高句麗を冊封
五九二年 五月	高麗遣使、方物を貢ず	(記) 高句麗冊封を謝す
五九四年 正月	新羅遣使、方物を貢ず	(記) 高句麗、隋に朝賀
五九七年 五月	高麗遣使、方物を貢ず	(記) 新羅を冊封
五九八年 二月	高麗を伐つ	(伝) 高句麗王を叱責
五九八年 六月	高麗王の官爵を黜す	(記) 高句麗、隋に朝賀
六〇〇年 正月	高麗など遣使、方物を貢ず	(伝) 百済、来り方物を献ず (伝・記) 高句麗、遼西を犯し、隋、これを討ち、高麗王の官爵を黜す。百済、隋の高句麗進軍の軍導を申し出る (記) 高句麗、隋に朝賀

\* (伝)は『隋書』東夷伝、(記)は『三国史記』

考えられない。新羅派兵の意志を馬子が保持し続けていたことがその背景にあったのであり、それは推古朝に引き継がれたのである。

## 二 推古朝初年の外交

崇峻後の国内政治の転換と言うことからすると、まず注目されるのは推古の即位である。この点、推古が直ちに即位しなかったとの見解も提出されているが、厩戸については『上宮聖徳法王帝説』に推古朝に馬子と共に「共輔天下」、『上宮聖徳太子伝補闕記』にも「小治田大宮御宇天王。以<sub>三</sub>太子<sub>二</sub>為<sub>三</sub>儲后<sub>一</sub>。天下政治決<sub>三</sub>於太子<sub>一</sub>。」とあることなどからして、推古は崇峻の後、直ちに即位していたのである。<sup>(15)</sup>

この状況下において推古三年七月、筑紫派遣軍が帰還する。筑紫派遣軍は筑紫に留まり続けていたのであるが、それがこの時、帰還するのである。『日本書紀』推古三年七月条は「將軍等至<sub>レ</sub>自<sub>三</sub>筑紫<sub>一</sub>。」とするのみであるが、何があつたのであろうか。

今、推古朝前半の政治を中心とした事蹟を『日本書紀』からみると表2のようになる。注意されることは、推古七年までは特に目立った動きがないことである。推古の政治姿勢を反映した結果ではないかと考えるが、対比のために、政権の意志決定方法を表3として敏達朝に遡ってみよう。



表2 『日本書紀』からみた推古朝前半の主な事蹟

年月	政治を中心とした事蹟	備考
元年 四月	厩戸皇子を皇太子とする	
九月	用明を改葬	
二年 二月	三宝興隆を詔	
三年 五月	高句麗より慧慈、来倭。厩戸の師となる	
七月	対新羅の將軍等、筑紫より帰還	
是歳	百濟より慧聰来倭	崇峻四年発遣
四年 一月	法興時、造り竟る	
五年 四月	百濟、王子阿佐を遣わし朝貢	
一一月	新羅に使者派遣	
六年 四月	新羅派遣の使者が帰還し、鵠を献上	
八月	新羅、孔雀貢上	
七年 四月	地震	
九月	百濟、駱駝など貢上	
八年 二月	任那救援を決定	遣隋使派遣
是歳	境部臣を大將軍として任那のために新羅を討つ	
九年 二月	皇太子、斑鳩に宮室を興す	
九年 三月	高句麗・任那に使者を派遣し、任那救援を要請	
一一月	新羅を討つことを議る	
一〇年 二月	来目皇子を新羅を討つ將軍とする	
六月	高句麗・任那に派遣した使者、帰国	
来目皇子、筑紫にて死去		
一一年 四月	当麻皇子を新羅を討つ將軍とする	

年月	政策の内容	意志決定方法*
敏達 元年 五月	王辰爾に高句麗の表疏を読解させる	天皇↓大臣↓王辰爾
三年一〇月	蘇我馬子を吉備へ派遣し、白猪の屯倉をおき、田部を増益する	
六年 二月	日祀部・私部の設置	詔
七年 三月	菟道皇女を伊勢祠の奉仕から解任	詔
一二年 七月	任那復興のため百濟より火葦北国造の子日羅召還	詔
用明 二年 二月	仏教帰依の可否を群臣に図る	詔↓議↓奏

七月	当麻皇子の妻の死により皇子帰る	新羅征討中止へ
一〇月	小墾田宮に遷る	
一二月	冠位十二階を制定	
二年 正月	冠位を施行	
四月	皇太子、憲法十七条を作る	
九月	朝礼を改める	
一三年閏七月	皇太子、褶の着用を命じる	
一五年 二月	壬生部を定める	
一五年 七月	遣隋使を派遣	大使小野妹子
是歳冬	倭国に高市池、山背国に大溝、河内国に戸苅池など、諸国に屯倉設置	

表3 『日本書紀』にみる政權の意志決定のあり方

崇峻 四年 八月	任那官家を建てることをはかる	詔→奏
推古 元年 四月	厩戸皇子を皇太子とし、摂政	
元年 九月	用明天皇を改葬	
八年 是歳	境部臣を大將軍とし、新羅攻撃（奏により中止へ）	
一年一二月	冠位十二階の制定	主体不明
一二年 正月	憲法十七条制定	主体は皇太子
一六年 九月	小野妹子を隋へ派遣	
二八年 是歳	天皇記・国記などを録す	皇太子・馬子の議
三一年 是歳	新羅征討計画	天皇↓大臣↓群卿に
三二年 四月	僧正・僧都・法頭任命	詔↓大臣↓推問↓上
三二年一〇月	蘇我氏が葛城県を乞うも許さず	表↓詔
三六年 三月	後継者のことなどを遺詔	奏↓詔
舒明 八年 七月	大派王、官吏の勤務態度の弛緩を告げるも蘇我蝦夷従わず	詔
一年 七月	百濟大宮・大寺造営開始	詔

\* 具体的に「詔」などと記してあるものを中心としてあげた。

政權の意志決定のあり方からみると、推古が主体的に政策に関与するのは推古三〇年の厩戸の死後のことであることが注意される。この点、推古一年の冠位十二階の制定の主体が明記されていないが、『上宮聖徳法王帝説』は厩戸と馬子を主体的に記しており、その意味

では推古が主導したと言えない。崇峻が主体的に政策に関与したことは先の任那再建を除いて認められないが、敏達・用明、そして舒明は主体的に関与しているのである。

そもそも推古の即位は敏達との間にもうけた皇子竹田を即位させる一面もあったことが注意される。すなわち、崇峻亡き後の王位継承の有力候補は敏達と広媛との間の皇子彦人大兄、用明の皇子厩戸、そして敏達と推古の間の皇子竹田であったと考えられる。この竹田を将来即位させる意向を推古がもっていたとしても不思議ではない。この点を重視するならば、有力な彦人、厩戸を即位させないため、さらには崇峻と妃小手子との間の皇子蜂子等を抑えるために、推古はみずからいわば中継ぎ的に即位したと考えられるが、一方、王家の権威の低下を伝統的なヒメの力を借りて対処しようとしてヒメの力を保持していた推古に即位が要請されたのであり、双方が相俟って推古の即位が実現したのである。この一方で、推古はその皇子竹田への後見を願って崇峻を弑殺した馬子の責任を問わなかったのである。<sup>②①</sup>したがって推古が政治にどの程度の関心をもっていたかは不明と言わなければならぬ。この点に関して注目されることは、推古がかなり神秘的な政治をおこない、それが受け容れられていたことである。この神秘政治は小林敏男氏が強調する推古のヒメとしての能力にもとづくであろうが、<sup>②②</sup>それ故、政治には関心を余り持っていなかったのではないか。推古は将来、その皇子竹田を即位させるため、より具体的に言えば厩戸、さらには彦人の即位を阻むために即位の要請を受けたのである。してみ

れば、政治に積極的に取り組むことがなかったとしても不自然ではない。

この推古の政治に対する姿勢は任那問題に対する態度においても同様であつたのではない。表4にみるように、以前、倭国は任那から調を受けていたのである。その任那が新羅に滅ぼされてからは倭国は新羅に任那の再興を迫るのであるが、推古朝は八年まで目立った動きを見せないのである。推古が政治には消極的であり、任那問題にも余り関心がなかったことが関係していると考えられる。

表4 任那関係記事

年月	関係事項
欽明二年 正月	新羅、任那の官家を滅ぼす
三年 三月	新羅に使者を送り任那を滅ぼした理由を問う
敏達四年 二月	任那・新羅・百済に使者派遣
一三年 二月	新羅への使者、任那へ
一四年 三月	任那再興を図り、使者派遣
崇峻四年 八月	任那再興の思いを述べる
一 一月	新羅に使者を送り、任那再興のことを問う
推古三年 七月	將軍等、筑紫より至る
八年 二月	任那救援を決定

この前提の上で推古三年の筑紫派遣軍の帰還を誰が命じたのかを考えた場合、表3から推古が主体的に政策決定をおこなうのは推古三〇

年の厩戸の死後のことであつたことが注意される。その意味では、もしそこに推古の意志が働いていたとみるのであれば、筑紫に軍が留まっていることの異常さを回避するための処置であつたと考えられる。当時の推古は馬子に政治を任せていたことからして、外交策の変更などと言った積極的な意志のもとになされた処置とは考えられない。もし筑紫派遣軍の撤兵に外交方針の転換などと言った積極的な意味を求めるならば、それは馬子の意志にもとづくものであつたのではない。

なお、ここで検討しておかなければならないことは、このころの厩戸の動向である。『日本書紀』推古元年四月条は「立厩戸豊聡耳皇子<sup>一</sup>為皇太子<sup>二</sup>。仍録<sup>三</sup>摂政<sup>四</sup>。以<sup>五</sup>万機<sup>六</sup>。悉委焉<sup>七</sup>。」と記す。これによれば、厩戸が政治を執る立場に就いたことを受け、任那問題は強硬策による解決ではなく、外交による解決へと方針が切り換えられ、それを受けて筑紫派遣軍が呼び戻された可能性が出てくる。

しかしこの厩戸の立太子記事には疑問が呈されている。直木孝次郎氏は『日本書紀』の立太子記事のあり方からして、この記事は信用がおけないとする。<sup>(23)</sup> そもそも推古の即位自体、上述したように厩戸を即位させないためであつた可能性があることに注目するならば、この直木氏の見解は首肯されるものである。後述するように厩戸が政治的な発言力を増すのは推古八年以降のことであることからすると、この筑紫派遣軍の帰還命令は厩戸以外の人物、すなわち馬子の意志にもとづいてなされたのである。



その背景であるが、注意されることは表1からうかがわれるように、五九四年に新羅が隋から冊封されていることである。これが何月のことか記したものはないが、新羅が隋に使者を送るのは時節的に春が多いことからして、一月から三月の可能性がある。その情報があるいは高句麗僧慧慈を介して届き、新羅に軍を送ることが躊躇されたのではないか。<sup>(25)</sup>かねて朝鮮三国は飛鳥寺建立を支援し、倭国との友好関係を深めようとしていたのであるが、さらにその強化が図られることとなる。推古三年における高句麗から慧慈、百済から慧聰の来倭はその一環であり、百済は更に推古五年に王子阿佐を倭に送って来るのである。<sup>(26)</sup>慧慈が厩戸の師となったことは『日本書紀』に記され、また阿佐と厩戸が関係を持っていたことは『聖德太子伝暦』に詳記されている。<sup>(27)</sup>山尾幸久氏は三人が厩戸側近の政治上の顧問格であったとみているが、百済より来倭した慧聰は慧慈とともに法興寺に住していること<sup>(28)</sup>、その法興寺は蘇我氏発願の寺であることからして、慧慈は厩戸の師とはなったものの、慧聰も蘇我氏との結びつきを保持した可能性がある。百済・高句麗は僧を送り込むことにより、倭との友好関係を強化しようとしたのである。彼らのもたらした外交知識がどの程度のものであったかは不明であるが、先にふれたように新羅が隋の冊封を受けたことはその中に含まれよう。

これを受け、対新羅強硬路線の放棄が決定され、筑紫派遣軍は帰還を命じられたのである。ここに外交を通して任那問題の解決が図られることとなり、推古五年十一月に新羅に使者が派遣されることとなる

のである。新羅もこれに応え、翌年四月に鵠や孔雀を贈ってくることになる(表2参照)が、この時の対新羅外交を主導したのはやはり馬子であろう。先にふれたようにすでに推古三年に馬子の意志のもとに征新羅軍が撤兵していることは、新羅との友好関係復活に作用するであろう。

なお、注意されることは、このように推古三年の段階で新羅強硬策が撤回されていることである。推古の即位に不満を持つ者がおり、その者達の目先を変えるために対新羅強硬策が提唱されたとの説があるが、このことはそれを否定するものである。後述するように推古八年にふたたび新羅強硬策が打ち出されるが、推古の即位に対する不満から目をそらさせるには時間が余りにもかかることになることも注意される。推古の即位に対する不満と切り離してとらえる必要がある。

### 三 推古八年の外交

新羅強硬策を撤回し、外交を通しての解決をめざすこととなったものの、東アジア情勢は五九八年＝推古六年以降、大きく変化する。表1にもみえるように、高句麗と百済が小競り合いを始めるのである。

『隋書』高麗伝は「開皇初頻有使入朝。及平陳之後、湯大懼、治兵積穀、為守拒之策」と開皇(五八一～六〇一年)の初めは高句麗がしきりと隋に入朝したものの、陳が平定される(五八九年)に及んで高句



麗王湯（＝嬰陽王）は大いに懼れ、兵を治め穀を積み、守拒の策をなしたとし、開皇一七年には高句麗王湯に対して叱責の爾書を下したところ、「得書惶恐」し「奉表陳謝」したものの、翌年には靺鞨の兵とともに遼西に攻め込んだので、高祖（＝文帝）はこれを聞いて大いに怒り、これを討たせるとともに、「黜其官爵」すなわち高句麗王の官爵を黜したところ、高句麗王は兵を罷き、もとのごとく隋に仕えることとなったと記す。

この一方、高句麗は百済を犯す。『三国史記』高句麗本紀嬰陽王九年（＝五九八年）条には「帝下詔黜王官爵」、「帝下詔諭。以高句麗服罪。朕已赦之。不可致伐。厚其使而遣之。王知其事。侵掠百済之境。」「三国史記」百済本紀威德王四五年（五九八）条には「帝下詔曰。往歲高句麗不供職貢。無人臣礼。故命將討之。高元君臣恐懼畏服。歸罪。朕已赦之。不可致伐。厚我使者而還之。高句麗頗知其事。以兵侵掠國境。」とあり、両国は交戦状態におちいるのである。百済において威德王の治世（五五八年～）が五九八年に終わり、それから恵王（＝五九九年）、法王（＝六〇〇年）を経て六〇〇年に武王（＝六四一年）が即位することも関係しよう。

このような情勢の大きな変化を受けて推古八年以降、その外交政策はまたまた変化することとなる。すなわち新羅強硬策がまた打ち出されるのである。『日本書紀』推古八年是歲条は

命<sub>二</sub>境部臣<sub>一</sub>為<sub>二</sub>大將軍<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>穗積臣<sub>一</sub>為<sub>二</sub>副將軍<sub>一</sub>。並闕名。則將<sub>二</sub>万余衆<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>擊<sub>二</sub>新羅<sub>一</sub>。於是直指<sub>二</sub>新羅<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>泛海<sub>一</sub>往之。

乃到<sub>二</sub>于新羅<sub>一</sub>。攻<sub>二</sub>五城<sub>一</sub>而拔。於是。新羅王惶之。拳<sub>二</sub>白旗<sub>一</sub>到<sub>二</sub>于將軍麾下<sub>一</sub>。而立割<sub>二</sub>多多羅<sub>一</sub>。素奈羅。弗知鬼委陀。南加羅。阿羅々六城<sub>一</sub>以請服。時將軍共議曰。新羅知<sub>レ</sub>罪服之。強擊<sub>レ</sub>不可。則奏上。爰天皇更遣<sub>二</sub>難波吉師神於新羅<sub>一</sub>。復遣<sub>二</sub>難波吉士木蓮子於任那<sub>一</sub>。並檢<sub>二</sub>校事狀<sub>一</sub>。爰新羅。任那二國遣<sub>二</sub>使貢調<sub>一</sub>。（中略）則遣<sub>二</sub>使以召<sub>一</sub>還將軍。將軍等至<sub>二</sub>自新羅<sub>一</sub>。即新羅亦侵<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>。とし、同様に『聖德太子伝暦』推古八年条は

天皇勅曰。新羅任那相攻如何。太子奏曰。新羅者虎狼之國也。不承我命。猶犯任那。不致滅亡彼猶不輟。臣乞命將加討令服。天皇然之。於是阿倍臣又云境部臣。為大將軍。穗積臣為副將軍。將万余衆。為任那伐新羅。到即攻五城而拔之。新羅王惶。拳白旗到于麾下。割六城而請降。將軍等奉詔免之。到自新羅。新羅亦侵任那。太子聞之。謂左右曰。寔如所議。

と記す。この『日本書紀』の記事は神功皇后の新羅征伐に似た物語りで疑わしいとされ、鬼頭清明氏も、いずれも正確でなくなった時点で將軍名や經過内容を変えて造作された史料にもとづいて『日本書紀』編者によって年別に編纂されたのではないか、とした上で、推古八年条が伝える新羅征討計画が旧加羅國の諸國の一部の反乱を契機に立てられたと言う一つの事実があったとみる。複雑ではあるが、新羅出兵しようとしたこと自体は事実であったと考える。

その新羅出兵において、境部臣を「大將軍」としている<sup>(35)</sup>のであるが、境部臣が蘇我氏の一員であることからして、蘇我馬子の意向にも

とづく人事であったと考えられる。馬子はかつての強硬路線に戻るのである。その背後に何があったかであるが、東アジア情勢の変化の他に注目されるのは厩戸の動静である。

『日本書紀』は翌推古九年二月条において「皇太子初興、宮于斑鳩。」と記す。これは竹田が死去したことにともなう可能性がある。

すなわち竹田は『日本書紀』推古三十六年九月条において、推古がその死後は竹田の陵に葬るべしと遺言したと記していることからして、竹田は夭逝したのである。その没年を具体的に記したものがないが、直木孝次郎氏は竹田の死の下限を厩戸皇子の同母弟来目皇子が撃新羅將軍となった推古一〇年とする<sup>(37)</sup>。推古もこの竹田が死去した段階で厩戸を後継者とすることを決心したのである。彦人がすでに死去しているため、推古が後継者とできるのは厩戸のみとなり、厩戸はこれを受けて単なる有力王族の一人ではなくなったのである<sup>(38)</sup>。このことを受けて厩戸は以後、次第に政治の中核に位置していくことになったのであるが、しかし竹田の死去はより具体的には、推古九年、早ければ八年のことであろう。これを受けて厩戸は推古九年二月に斑鳩に「宮」を造ることになったのではないか<sup>(40)</sup>。石母田正氏は厩戸の万機総摂の初めと推測しているが、ここに厩戸は政治的な立場を公認され、独自の政治姿勢をとることとなるのである。

すなわち厩戸が当初、竹田を即位させるために推古から疎外されていたとみることが正しいならば、推古八年段階はまだ積極的な発言をするにいたらなかったが、その八年から九年にかけて竹田が死去する

に及んで、推古はやむなく厩戸を後継者として遇し始めるのである。このことによって、それまで馬子が独占していた政治に厩戸が関与し始めることは予想されることである。そこで馬子はまだ厩戸の体制が整わないうちに先手を打ち、推古八年に対新羅強硬策を打ち出したのではないか。馬子は東アジア情勢の変化をみてかつての強硬策に戻るのである。この時、厩戸は推古から後継者としての地位を認められた直後であるため、この馬子の姿勢に圧され、その強硬姿勢に反対できなかったのではないか。

しかし新羅と本格的に事を構える情勢になった時、気がかりなことは隋の動向である。隋は高句麗と戦争を開始したものの、その戦争はすぐに終結する(表1参照)。このことは、隋の兵力に余裕が生じることを意味するが、そのことは隋が新羅を冊封していることから、新羅に対して倭国が兵を構えれば隋が前面に出てくる可能性のあることを意味する。そこでこの一方で推古八年＝六〇〇年に遣隋使を派遣するのである。

『隋書』倭国伝開皇二〇年条には

倭王姓阿每、字多利思比孤、号阿輩雞彌、遣使詣闕。上令所司訪其風俗、使者言、倭王以天為兄、以日為弟、天未明時、出聽政、跣坐、日出便停理務、云委我弟。高祖曰、此大無義理、於是訓令改之。王妻号雞彌、後宮有女六七百人、名太子為利歌彌多弗利。

とあり、開皇二〇年(＝六〇〇年＝推古八年)に倭国が使者を隋に派遣したことが知られる。『日本書紀』にはこのことが記されていない<sup>(41)</sup>。



が、遣隋使が派遣されていたのである。

この時の遣隋使派遣の目的について、坂本太郎氏は、新羅征討を視野に入れて遣隋使が派遣されたとし、石母田正氏は任那あるいは対新羅問題を遣隋使派遣によって解決を図るとともに、外交上の立ち後れを取り戻すものであったとする。<sup>(44)</sup> 山尾幸久氏も新羅への戦争準備が関係するとみている。<sup>(45)</sup> 西嶋定生氏も同様に任那問題の処理のため新羅への出兵が計画されるとみるものの、新羅は隋から冊封されているため、行動を起こす前に隋に使者を派遣したとみている。<sup>(46)</sup> 若槻義小氏も当時の緊迫化した東アジア情勢の中で国内政治の分裂傾向を是正するために朝鮮三国、特に新羅に優越する名目的立場を獲得するための方策として礼の導入をめざしていたみる。<sup>(47)</sup> この点、井上光貞氏は新羅との関係とは無関係に、隋の冊封が朝鮮三国に及んでいたので、隋との国交を無視することができなかったためとみているが、新羅による任那占領に対する軍事的制裁を実行すると言う外交政策の一環として遣隋使が派遣されたととらえられているのである。

しかしこの使者は高祖から「此大無義理」とされ、「於是訓令改之。」との処置を受けるのであるが、誰がこの対隋外交を指揮したのであるか。これについて従来は厩戸皇子とされてきた。井上光貞氏は(一)厩戸はまず出兵を予定しないで外交により任那問題を解決しようとしたが、(二)隋の高句麗出兵を受けて強硬な出兵策が出され、それが力を得たために、にわかに派兵することとなり、政治の最高責任者であった厩戸はやむなくその兄弟を將軍とした。(三)しか

し推古九年三月に任那救援を求めるために高句麗・百済へ派遣した使者が六月に帰国する。(四)その使者の状況報告は二国が好戦的であることを伝えたであろうものの、一方で戦争に巻き込まれる危険性からの厭戦気分を引き起こし、結局来目皇子の死後、強硬路線は瓦解の方向に向かい、(五)大帝国が中国に誕生したことを考慮に入れた高度の外交政策への転換が図られたとする。<sup>(48)</sup> 山尾幸久氏も新羅への戦争準備が関係するとみるが、「このような海外の状況へのヤマトの外交・軍事両面での対応」は「支配集団を厩戸王(聖徳太子)に結集させることとなったとみている。<sup>(49)</sup> しかし馬子の可能性もあるのである。かねて蘇我氏は百済系の渡来者を傘下に置き、その知識や技術力を利用してきたところであり、<sup>(50)</sup> 百済との関係を重視したと考えられる。百済と高句麗が争っている今、隋と倭国が結ぶことは百済に有利に作用することから、馬子が隋との外交を開くことは不思議ではなく、推古もそれを認めたのではないか。

このようにみると、一連の政策の最高責任者が厩戸であったかは疑わしいのである。先にふれたように厩戸が後継者と認められる直前であることも注意される。従来、厩戸を推古朝当初から政界の第一人者としてみなし、説が立てられてきたのであるが、厩戸は崇峻弑逆時には未成年であった。<sup>(52)</sup> 当時は成年二〇歳に達していることが重要視されていたこと、また当初は推古の後継者として認められていなかったこと、<sup>(53)</sup> 政治から離れて位置していたのである。それが竹田の死後、推古の後継者と認められ、それ以後、政治に携わることとなった



可能性が高いのであり、それは推古八年以後のことなのである。その意味では厩戸は遣隋使の派遣された推古八年段階にはいまだ政治的な手腕は持ち合わせていなかったと考えられるのである。『聖德太子伝暦』など、いずれも厩戸をたたえながらこの六〇〇年の遣隋使について触れていないことも思うと、それは馬子の主導であったためである可能性が高いと言えよう。新羅に対して強硬策をふたたびとることを提唱した馬子は隋と正面切つて対決することを恐れ、遣隋使を送つたと考えられるのである。

#### 四 推古九年以降の外交

この遣隋使派遣により、新羅出兵をしても隋に対処できると考えてか、表2にみえるように推古九年三月に高句麗と百済に使者が派遣され、任那救援が要請される。高句麗には大伴連嚙、百済へは坂本臣糠手が派遣されるのであるが、遣隋使の失敗がもたらされていたかは微妙な時期であることが注意される。そのことからして、遣隋使の成功を予期しての使者派遣であろう。

この使者派遣が誰によってなされたかであるが、それはやはり対新羅強硬策を唱えていた馬子ではないか。大伴嚙連、坂本臣糠手が前掲の史料にみえるように蘇我氏の側に立つて対物部戦にも参加していることからして蘇我氏寄りの人物であり、馬子の意を受けて赴いた可能性が高いのである。厩戸は推古の後継者とされたものの日が浅く、政

治の主導権はいまだ馬子にあったものと考えるのが妥当であろう。

しかし、馬子に促されたとは言つても厩戸は後継者の地位につき、対新羅強硬策支援を認めた以上、推古九年十一月に対新羅出兵、翌一〇年二月における厩戸の兄弟の来目皇子の將軍任命をせざるを得なかったのではないか。<sup>(56)</sup> 厩戸がその兄弟を新羅派遣軍の將軍に任命していることから政治上の最高責任者となったことが関係するところとえられかねないが、必ずしもそうではないのである。<sup>(57)</sup>

この馬子主導のもとに打ち出された強硬策は、しかしながら、来目皇子の病死などによって結局、放棄されることになる。遣隋使の派遣が失敗に終わったこと、厩戸がもとより積極的な新羅強硬策論者ではなかったことが関係しよう。

その厩戸であるが、推古の後継者として次第にその政治的な地位を確立していったことにより、しだいに馬子とは異なる外交策を打ち出すこととなる。それを物語るのが六〇七年＝推古一六年の遣隋使派遣である。『隋書』倭国伝には

其王多利思比孤、遣使朝貢。使者曰、聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法。其国書曰、日出処天子、致書日没処天子、無恙、云々。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰、蛮夷書有無札者、勿復以聞。

とあり、仏教の導入がうたわれている。<sup>(59)</sup> このこと自体は、厩戸の仏教帰依の延長上にあることであり、主体が厩戸であったとみて問題はなない。おそらく背後には厩戸が確たる地位を朝廷内に確立したことが

あったのであろう。また開皇二〇年の遣隋使派遣の失敗が馬子が政治を主導することに否定的に働いたのである。ここにいたって厩戸が政界の第一人者として位置し、仏教受容に努める姿勢を打ち出すことにつながるのである。厩戸の死後、ふたたび新羅強硬論が登場するのはその象徴であらう。

## おわりに

以上、推古朝前半の外交路線がどのように展開されたかをみてきたのであるが、一貫した政策が同一人物によって採られていたわけではなかった。東アジアの情勢、国内政治情勢の変化によって一貫性のないさまざまな政策が採られ、またその主導者も馬子から厩戸へと変化したと考えられるのである。この点を確認して小稿を終えることとしたい。

## 註

- (1) 代表的なものに西嶋定生「七—八世紀の東アジアと日本」(『日本歴史の国際環境』東京大学出版会、一九八五年)、井上光貞「推古朝外交の展開」(『井上光貞著作集』第五卷、岩波書店、一九八六年、初出一九七一年)、鬼頭清明「推古朝をめぐる国際的環境」(『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房、一九七六年)などがある。
- (2) この点、鬼頭清明氏はその外交を隋を中心に論じることの不十分さを説き、国内の権力構造も重視すべきと説いている(「推古朝をめぐる国際的環境」前掲)が、しかしなお不十分である。

- (3) 拙稿「崇峻殺害前後の政治状況と蘇我氏」(栄原永遠男他『律令国家論集』塙書房、二〇一〇年)。
- (4) 『日本書紀』崇峻五年二月条、推古即位前記。
- (5) 『日本書紀』欽明二三年(五六二)正月条は「新羅打減任那官家」とし、更に「一本云。廿一年任那滅焉。」と注す。
- (6) 後掲の表4を参照されたい。
- (7) 鬼頭清明「推古朝をめぐる国際的環境」(前掲)。
- (8) 対物部戦においては、厩戸も参加しているが、年若く、その中心は蘇我氏が位置し、蘇我氏のために参加したと考えるのが穏当であらう。
- (9) 馬子と関係の深い者を筑紫に送ることによって馬子の力をそごうという崇峻の意志が働いた可能性はあるが、しかし、後述するように崇峻の死後もそのまましばらく筑紫に留め置かれたことは、根底に新羅問題があったことを示すものである。
- (10) 『日本書紀』崇峻五年二月条。
- (11) 石母田正「国家成立史における国際的環境」(『日本の古代国家』岩波書店、一九七一年)。
- (12) 西嶋定生「七—八世紀の東アジアと日本」(前掲)。
- (13) 井上光貞「推古朝外交の展開」(前掲)。
- (14) 門脇禎二氏は推古の即位は厩戸の死後のことであったとみている(『古代の女帝』『日本史の謎と発見4 女帝の世紀』毎日新聞社、一九七八年、「聖徳太子は大王ではなかったか」『歴史と人物』第九卷一二号、一九七九年、「舒明天皇即位時紛争事件」『大化改新』史論)上、思文閣出版、一九九一年)。また山尾幸久氏は五九七年以降、推古は厩戸に「天皇事」を委ねざるを得なくなったとみている(「ヤマト国家の展開と東アジア」『古代の日朝関係』塙書房、一九八九年)。
- (15) 厩戸を「大王」ないし「天皇」とした史料がないことも注意される。
- (16) 『日本書紀』は推古二九年とするが、『天寿国繡帳』などに従う。



- (17) 『聖德太子平氏伝雜勘文』下三(聖德太子奉賛会『聖德太子全集』第二巻、臨川書店、一九四四年)は長谷部王、泊瀬部、崇峻は用明皇后と多米王との間に生まれた佐富女王との間に葛城王、大伴奴加之古連の女古弓古郎女との間に波知乃古王がいたとする。
- (18) 井上光貞「古代の皇太子」(『日本古代国家の研究』岩波書店、一九六五年)。
- (19) 小林敏男「女帝考」(『古代女帝の時代』校倉書房、一九八七年)。
- (20) 拙稿「崇峻殺害前後の政治状況と蘇我氏」(前掲)。
- (21) 『隋書』倭国伝に「天未明時、出聴政踞坐、日出便停理務、云委我弟。」とある部分がそれを象徴する。
- (22) 小林敏男「女帝考」(前掲)。
- (23) 直木孝次郎「厩戸皇子の立太子について」(『飛鳥奈良時代の研究』塙書房、一九七五年)。
- (24) 一月から三月のこととして慧慈の来倭が五月のことであるから、慧慈が高句麗を発つ時点においては未だ冊封がなされていない可能性がある。しかし新羅が隋に使者を派遣し、冊封を願っているとの情報は慧慈のもとに届いていたとみても良いのではないか。
- (25) 井上光貞氏も新羅が冊封されて、事態が安定したためとみている(『推古朝外交の展開』前掲)。
- (26) 『日本書紀』推古三年五月条。
- (27) 『日本書紀』推古三年是歳条。
- (28) 『日本書紀』推古五年四月条。
- (29) 山尾幸久「ヤマト国家の展開と東アジア」(前掲)。
- (30) 『日本書紀』推古四年一月条。
- (31) 『日本書紀』崇峻即位前紀用明二年七月条。
- (32) 鬼頭清明「推古朝をめぐる国際的環境」(前掲)。
- (33) 三品彰英「聖德太子の任那対策」(『聖德太子論集』平楽寺書店、一九七一年)。また井上光貞氏も類似した新羅征討記事が『日本書紀』推古三十一年条に掲げられていることから、推古三十一年条を正しいとみて新羅への強硬路線は聖德太子没後の推古三十一年とする。井上氏は聖德が廟堂の中心にたつことによって推古朝の対新羅強硬路線から対隋外交へと移り、その下で新羅との友好路線へ切りかわったが、隋が滅んでからは強硬路線が復活の兆しを見せる。しかし当初は約定により相互に利益を認めあい、太子の死後直後は穏健派の主導の下に外交使節が送られたものの、その後強硬路線が復活し、軍事行動が実行に移されたとする(『推古朝外交の展開』前掲)。
- (34) 鬼頭清明「推古朝をめぐる国際的環境」(前掲)。
- (35) もっとも鬼頭清明氏が説いている(『推古朝をめぐる国際的環境』前掲)ように、「大將軍」とあることには疑問が持たれる。
- (36) 『聖德太子伝暦』に「大臣叔父蘇我境部臣罔瀬」とある。
- (37) 直木孝次郎「厩戸皇子の立太子について」(前掲)。
- (38) 井上光貞氏「古代の皇太子」(前掲)や井出久美子氏(『大兄制』の史的考察『日本史研究』一〇九、一九七〇年)は物部戦の頃死去したとする。しかし山尾幸久氏(『大化改新論序説』上『思想』五二九、一九六八年・『大化改新直前の政治過程について』上『日本史論叢』一、一九七二年・『日本国家の形成』岩波書店、一九七七年、第一章四節)は対物部戦争の折に、彦人は除かれたとみている。しかし彦人の子舒明が推古元年生まれと推定されることからして、推古初年には生存していたとみる見解(蘭田香融「皇祖大兄御名入部について」『日本書紀研究』三、塙書房、一九六八年、直木孝次郎「厩戸皇子の立太子について」前掲)が妥当であろう。
- (39) かつて大兄の制があつたが、推古と厩戸の系譜関係は厩戸を大兄とすることを許さず(拙稿「王の後継者候補」『日本歴史』七三〇、二〇〇九年)、それに代わるものとして「太子」とされた可能性がある(蘭田香融「皇祖大兄御名入部について」前掲)。
- (40) 平林章仁氏は上宮王家の斑鳩進出は、大和川北岸の水陸交通の要衝を掌握し、対外交渉を進め、先進文物の優先の摂取を図り、上宮王家独自の経済基盤の構築、独立した政權基盤の創設をめざす一方で、敏



達系王族の広瀬郡進出に対する蘇我系王族の巻き返しであったとみている（『蘇我馬子とその儀礼』「蘇我氏の実像と葛城氏」白水社、一九九六年）。

(41) 石母田正『日本の古代国家』（前掲）三二二ページ。

(42) このためもあって遣隋使が何度派遣されたかについては論争がある。この件に関しては篠川賢氏の「遣隋使の派遣回数とその年代」（『日本古代の王権と王統』吉川弘文館、二〇〇一年、初出一八八六年）に詳しい紹介がある。なお、『日本書紀』が記さなかった理由について、高橋善太郎氏は「遣隋使の研究」（『東洋学報』三三―三・四、一九五一年）において『日本書紀』編者が成果を上げることができなかったために削除したとみる。また坂本太郎氏は坂本太郎氏は実際は国使ではなく、九州か、山陽あたりの豪族が私的に派遣したためとみる（『日本書紀』と『隋書』「坂本太郎著作集 第二巻 古事記と日本書紀」吉川弘文館、一九八八年、初出一九七六年）。若槻義小氏は「七―八世紀の東アジアと日本」（『冠位制の成立と官人組織』吉川弘文館、一九九八年）において、この使節は倭国と隋との国交を開くための予備的性格を帯びており、正式のものとはみていなかったためとする。

(43) 坂本太郎『日本書紀』と『隋書』「坂本太郎著作集 第二巻 古事記と日本書紀」前掲。なお、坂本氏は新羅出兵に関係する場合の上の結論であるとする。

(44) 石母田正『日本の古代国家』（前掲）二四ページ。

(45) 山尾幸久「ヤマト国家の展開と東アジア」前掲。

(46) 西嶋定生「七―八世紀の東アジアと日本」前掲。

(47) 若槻義小「冠位十二階と外交政策」前掲。

(48) 井上光貞「推古朝外交の展開」前掲。

(49) 井上光貞「推古朝外交の展開」前掲。

(50) 山尾幸久「ヤマト国家の展開と東アジア」前掲。

(51) 加藤謙吉「蘇我氏の発展過程」（『蘇我氏と大和王権』吉川弘文館、

一九八三年）、山尾幸久「蘇我氏の発展」・前川明久「渡来人と蘇我氏」（ともに黛弘道編『古代を考える 蘇我氏と古代国家』吉川弘文館、一九九一年）。

(52) 『上宮聖徳法王帝説』は「甲午年産」とし、これによれば敏達三年（五七四年）生まれとなり、『上宮聖徳太子伝補闕記』も太子生年一四の丁未年（用明二年）五八七年に物部氏と蘇我氏が争ったとあるから五七四年生まれ、また『本朝皇胤紹運録』は敏達二年癸巳生まれとされているから崇峻五年（五九二年）には未成年と解することができる。なお『扶桑略記』は推古元年（五九三年）に二二歳とし、これによれば敏達元年生まれとなり、これならば微妙な年齢となる。また『伝暦』も元年生まれとする。

(53) 村井靖彦「王権の継受」（『日本研究』一、一九六四年）、河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』（吉川弘文館、一九八六年）第一章第一節。

(54) 『日本書紀』推古九年三月条。

(55) 『日本書紀』によれば、推古一五年七月に派遣された使節の場合、一六年四月に筑紫に到着し、六月に難波に到着している。また一六年九月に派遣された使節は一七年九月に帰国している。

(56) いずれの場合も遣隋使の派遣が失敗が伝わっており、その意味では当初の新羅出兵計画に問題が生じていることが認識されているものの、一旦動き出した方針をすぐには撤回できなかったのであろう。

(57) 井上光貞「推古朝外交の展開」前掲。

(58) 『日本書紀』は推古一〇年六月条において、筑紫にいたった来目皇子が病に臥して新羅を討つことができなくなったこと、一一年二月条において、来目皇子が筑紫で死去したこと、同年四月条において、来目皇子の兄当麻皇子を將軍としたものの、同年七月条において、筑紫に向かった当麻皇子の妻が明石で死去したために結局帰還し、新羅征討が中止されたと記す。

(59) この理由の一つに儒教・道教による中国の天下観念を克服するのと

(60)

もに冊封体制に対抗するために仏教による宇宙観・世界観を獲得しようとしたことがあったと石上英一氏は説いている（『古代東アジア地域と日本』『日本の社会史』1、岩波書店、一九八七年）。『日本書紀』推古三二年是歳条。